

恒続林誘導に向けた広葉樹材利用に関する調査（R3～4）

国補：林業普及情報活動システム化（林業試験研究情報調査）

清川陽子・増田勝則

1. はじめに

奈良県では森林の多面的機能を恒久的に発揮し続けるため「奈良県森林環境の維持向上により森林と人との恒久的な共生を図る条例」を令和2年4月1日に施行した。その中で、地域の特性に応じた様々な種類の樹木が異なる高さで存在し、適時かつ適切な方法による保育及び択抜による継続的な木材生産により環境が維持される「恒続林」への誘導を定めている。

今後「恒続林」への誘導に向け、その地域にあった広葉樹の植栽、保育、伐採を実施していくことが想定されるが、条例にもある継続的な木材生産には伐採した木材に利用価値があり、高値で取引されることが求められる。

そこで、本研究では広葉樹材の用途別に要求される特性を整理し、継続的な木材生産が望まれる有用樹種とその特徴や、建築士など専門家による広葉樹材の印象等を広く情報発信していくこととする。

2. 材料と方法

①県内市場における広葉樹材の取引調査

県内における広葉樹材の取引価格や取扱量などの状況を把握するため、県内で広葉樹材の取扱量が最も多い桜井木材協同組合と奈良県銘木協同組合の原木市場で広葉樹材の取引状況の調査を行った。

②木工業者に対する調査

広葉樹材を取り扱う、木工、家具の製作・販売をしている県内外の7業者に、広葉樹材の利用状況について聞き取りを行った。

③広葉樹材の利用に関する調査

広葉樹材専門の原木・製品市場が存在する岐阜県及び古くから家具の産地として有名な福岡県大川市で広葉樹材の取扱状況や課題、早生樹であるセンダンの利用状況などの情報収集を行った。



3. 結果と考察

①県内市場で、主に取引されている広葉樹はケヤキ、トチノキでクワ、ムク、シイ、シデ、カエデなども取引されていた。主な用途としては家具、木工、チップであった。だんじりの土台、寺社仏閣の門でも利用されていた。主な購入者は製材関係者と県外の市場関係者であった。空のあるトチノキや200年を超えるケヤキは高額での取引事例があった。

②木工業者の広葉樹取扱樹種は様々であったが、共通して使用されている樹種はミズナラ、タモ、クリ、サクラ、カエデ、ウォルナット、チェリーであった。使用理由としては加工上問題なく、入手上も普段取引している業者での購入が問題なく可能であるということがあげられた。用途はフローリング、木工や家具、建具などであった。

③岐阜県の市場で主に扱われている広葉樹はトチノキ、サクラ、クリ、ケヤキ、ミズメ、ホオノキで、主な用途としては家具、建具、木工、突板などであった。現在扱われているのは天然林からの出材であるが、搬出コストなどの問題により国産材の出材量は減ってきている。また、福岡県大川市では、早生樹であるセンダンの活用を行っており、机や椅子などの家具に利用されている。現在は天然のセンダンを使用しているが、今後の材供給体制を考え、植林も行われている。

様々な特徴のある広葉樹材は内装材や家具等多種多様な用途があり、ユーザーの国産材志向の高まりもあるため、需要があることがわかった。そこで、令和4年度は住宅建設などの設計事務所・施工業者に奈良県内で生育可能で利用価値のある有用樹種について見た目の印象や活用したい用途などを把握するアンケート調査を実施し、建築物内装等の意匠としての広葉樹材利用について検討する。